

東電柏崎刈羽原発6号機、本格的な発送電開始 14年ぶり首都圏に電力

2026/2/16 22:00 | 日本経済新聞 電子版



東電は柏崎刈羽原発6号機で発電した電力の送電を始める様子をオンラインで報道陣に公開した（16日、東京都千代田区）

[東京電力ホールディングス](#)は16日、柏崎刈羽原子力発電所（新潟県）6号機からの送電を始めた。起動中の原子炉に問題がないと判断し、14年ぶりに本格的に発電機を回して首都圏に電力を送る。福島第1原発事故後に東日本で原発が再稼働するのは2例目。発送電しながら設備の最終検査を進め、3月18日の営業運転開始を目指す。

東電は16日午前3時ごろに試験的に発送電を始め、発電機が異常なく起動したことなどを確認した。同日午後10時から本格的な発送電を始めた。段階的に出力を定格出力の50%程度（68万キロワット）まで高めて、設備などに不具合がないかを確認する。

東電は首都圏に送電しながら数日かけて設備を検査する。2月下旬には一度、原子炉を停止させて、設備全体に異常がないかを確認する。

柏崎刈羽原発の検査工程	
2月9日	原子炉起動・昇圧。高温の蒸気を使って原子炉や冷却設備を検査
2月15日	発電機のタービンを起動
2月16日	発電した電気の送電を開始
2月下旬	一度原子炉を停止。設備全体を確認
2月下旬～3月初旬	再び原子炉起動。段階的に最大出力に
3月18日	国の検査。合格すれば営業運転に

(注) 異常があれば日程見直しの可能性も

最終的な営業運転の開始は3月18日を目指す。原子炉を再び起動して発電機の出力を最大まで高め、国の最終検査を受ける。この検査に合格すれば営業運転となる。

柏崎刈羽原発6号機は1月21日に再稼働したが警報装置の不具合で停止し、2月9日に再び起動した。12日には原子炉内の状況を計測する移動式の設備が正常に動作しない不具合が発生。計画より遅れて本格的な発送電を始めた。

東電は1月に公表した新たな再建計画のなかで、6号機を2025年度中、7号機を29年度中に再稼働する前提を示した。原発は火力発電に比べて燃料コストが安いいため電気の調達コストを減らせる。柏崎刈羽原発は1基稼働することで、年間1000億円の利益改善につながるという。

11年の東日本大震災後、原発の再稼働は西日本が先行した。東日本では24年に東北電力の女川原発2号機が原子炉を起動させた。柏崎刈羽原発6号機の再稼働は東日本では2基目で、国内全体では15基目となる。

柏崎刈羽原発6号機の再稼働に続くのが、北海道電力の泊原発3号機だ。北海道知事は25年年末に再稼働を認める意向を示した。北海道電力は防潮堤などの安全対策工事を進めており、27年の再稼働を目指している。

【関連記事】

- ・ [柏崎刈羽原発6号機、試験的な発送電開始 16日にも本格発電](#)
- ・ [「西高東低」の原発利用、柏崎刈羽再稼働で転機](#)

- [データセンター電力網「余分な確保」3割 東電管内、電気代影響も](#)
- [原発ゼロ14年、東京電力の電力販売2割減 再稼働テコに戦略立て直し](#)

BUSINESS DAILY by NIKKEI

企業の最前線、朝メールで [ご登録はこちら](#)

会員
限定

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.